

生涯学習と体験学習

星 野 欣 生 （南山短期大学教授）

グループ「さなぎ」。“限らない可能性をいつまでも秘めて、成虫にならずにいよう”という期待をこめて付けられた名前である。月に一回、名古屋市千種社会教育センターに集まって、学習を続けている女性ばかりの自主グループ。スタートしたのは、1981年。上記千種社会教育センターでの公開講座「人間関係十講」（筆者担当、10回）が終わった後である。更に学習を続けたいと、自主的に集まった20数人でスタートしたが、増えたり減ったりしながらも、10年近くつづき、今も毎月10人前後の人達が集まって、学習している。毎回、私も参加して、人間や人間関係にまつわるさまざまな話題をとりあげて、体験学習の実習をしたり、本を読んだり、話し合ったりしている。当初は、どうしても私中心であったが、回を重ねるにつれて（メンバーの入れ代わりがありながらも）、私が口をはさむ機会がないまますすんでいくことがしばしばである。それ程、相互の話し合い（かかわりあい）に熱中して、時を過ごしている。はじめは、どうしても閉鎖的であった関係が、だんだん、開放的になり、お互いに、言いたいことを言い合えるようになっていく。時に、学習会が、悩み相談会になったりする。2時間余の短い時間であるが、そこでの体験が、それぞれの生き方にヒントを与えたり、明日へのエネルギーの源となっていることは間違いないようである。話の中身もさりながら、そこでのかかわりが、人を惹きつけているように思えるのである。グループ「さなぎ」は、これからゆっくりとした歩みを続けていくだろう。生涯学習のひとつの姿ではないだろうか。

I 生涯学習とは

1 生涯学習の意味

生涯学習とは何かについては、さまざまに解説されているが、基本的には、中央教育審議会の答申（1981年）にある、「国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行なう学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念」によっていることが多いようである。

ここでは、まず、私は、生涯学習の主体としての「人」を、次のように考えたい。

- ① 人は、もともと、学習への欲求をもっているものである。
- ② 人は、この世に生を享けて以来死にいたるまで、学びつづけるものである。成長、あるいは、変化しつづけるものであると言ってもよい。継続ということに意味がある。
- ③ 人は、いつも、自分のもっている可能性を信じているし、それを最大限に発揮できることを希っている。
- ④ 人は、自らを動機づけした時に多く学ぶことができる。学習を強制されることを好まない。
- ⑤ 人は、それぞれが、独自性をもった存在である。それぞれなりの学び方をもっている。
- ⑥ 人は、自からの体験も含めて、あらゆる機会（時、場）から学ぶことができる。

以上を前提として、私は、生涯学習とは、「ひとりひとりが、自己実現に向けて、生涯にわたって、自らの意志で学び続けること」としたい。詳しくは、以下の各章でふれていく。

2 生涯学習の構造

ここでは、生涯学習を、三つの側面をもったもの（立方体）として考察したい。三つの側面とは、

- (1) 学習の機会・場（フィールド）
- (2) 学習の内容（コンテンツ）
- (3) 学習の過程（プロセス）

である。

- (1) 学習の機会・場（フィールド）

生涯学習にとって、学習の機会とは、日常生活の場そのものであるということもできる。それは、その人の意識のもち方次第であると言えるが、現実には生活に流されてしまって、なかなか、意識的にその場を利用する

ことができないものである。更に、学習への動機づけを促進したり、学習の幅を広げるために、私たちは、つくられたさまざまな場を、今、持っている。特に、「生涯学習」が流行になってしまっているような現代社会。学習の場は多様に用意されており、目まぐるしい程である。いくつかをあげてみると、

◆学校（大学、短大、高校など）の社会人への開放

- ・社会人入学
- ・講座の開放
- ・公開講座（定期、特別）の実施など

◆国、地方自治体などが実施する諸活動

- ・放送大学
- ・市民大学
- ・社会教育センター、公民館などの公開講座
- ・学習リソースなどのネットワークづくり

◆民間のカルチャー事業

- ・カルチャーセンター
- ・文化イベント、セミナーなどの開催

◆組織内教育

- ・組織内での各種研修（企業内教育など）
- ・大学、研究機関などへの留学、派遣

(2) 学習の内容（コンテンツ）

- ◆知識の習得
- ◆技術の習得
- ◆スポーツ活動
- ◆文化活動
- ◆資格の取得
- ◆生き方、学び方の習得

(3) 学習の過程（プロセス）

- ◆能動的な学習態度（自学、自習）
- ◆学習者の相互作用
- ◆関係から学ぶこと
- ◆体験から学ぶこと

生涯学習といった場合、一般的には、学習の機会・場と学習の内容に関心が向けられ、学習の場で起きていること（プロセス）は無視されがちである。例えば、大学での公開講座にしても、多数の人たちが集まっているが、一方的に講義をきき、ノートをとるのみで終わってしまう。また、数回つづくような市民講座でも同様で、講師とも、そこにともに集っている人たちとも、一言も

話す事なく終了してしまうことが多いようである。言うまでもなく、それも大切な学習であり、それを目的にして参加している人も多い筈である。でも、それはどちらかといえば、受動的な色彩が強いものといえよう。講師中心であって、学習者中心ではない。そのような傾向が強い場合、更に残念なのは、その場で起きていること（プロセス）から学ぶ視点が欠けていることである。私たちは、さまざまな知識、情報、経験をもってそこに集っている。講師が提供してくれるものは、その中でのひとつの情報であるに過ぎない。とすれば、なんらかの形で学習者の間に相互作用をもつことで、学びの内容を広め深めることができる（互いに知識、情報、経験を交換しあうことで）と同時に、関係がつくられる過程で、自分のありようを検討することができ、それは、その人の次の生き方に影響を与えることになる。それは、生涯学習が自己実現を目指すとするならば、欠かすことのできない視点ではないだろうか。このことは、さまざまな団体が用意している学習のあらゆる機会にあてはまることである。

II 生涯学習と体験学習をつなぐもの

1 体験学習とは

体験学習は学習者の体験をベースにした学習法である。ここでの体験とは、学習の場およびその周辺でのあらゆる体験を言う。それは、学習者の中で起きていること、学習者相互の間で起きていることなどである。それをプロセス（関係的過程）といい、従って、体験学習は「プロセスから学ぶ学習」ということができよう。それは、以下のステップを踏まなければならない。

- ① 体験する（何かしてみる）——自分の具体的な体験
- ② プロセスをみる（何が起こったか）——体験のわかちあい
- ③ プロセスを考える（どのように、なぜ起こったのか）——データの奥にあるものを探る
- ④ 仮説をつくる（学んだこと）——体験が私に教えてくれたこと
- ⑤ プランをたてる（そこでどうする）——新しい行動への適用
- ⑥ 試みる（プランを実行する）——新しい行動=①体験する（①から⑥がサイクルになって繰り返される）

以下に、体験学習を特徴づけるものを、いくつか挙げてみる。

a 体験学習は、学習者中心の学習である。

体験学習の主人公は学習者である。従って、教師の役割は、学習者の体験を明確化し、仮説化するのを助けることである。教師主導は避けられねばならない。

b 体験学習は、主体的な学習である。

体験は他人のものでなく、学習者自身のものである故に、学習者が主体

的に参加することが強く望まれる。一人称（私は）の学習である。

c 体験学習は、リアル（現実性）な学習である。

学習者がいる場、つまり、「いま、ここ」で起こっていること—自分、他人、グループあるいは相互の関係の中で—が学習の素材になる。

d 体験学習は、創造的な学習である。

学習者が自分の手でつくっていく学習である。能動性が要求される。

e 体験学習は、試みる学習である。

新しい自分を発見し、可能性を見つけだすためには、それまでの行動の枠にとらわれず、新しい状況に挑戦することが期待される。

f 体験学習は、協働の学習である。

学習に参加する者の相互作用が、学習の素材になると同時に、互いに助け合うことで、その学びはより深いものとなる。

g 体験学習は、「学び方を学ぶ」学習である。

私たちは、与えられる学習に慣れている。与えられたものを覚えていくことが、唯一の学習であると思っている節すらあるが、与える人（例えば教師）がいなくなると学習が終わってしまう。現代の教育によく見られる現象である。しかし、「学び方」を体得しておれば、いつでも、自分の力で学習を続けることができる。体験学習では、学習内容を追いながら、同時に、学び方を体得することになる。例えば、人間関係（学習内容）を学びながら、自分の人間関係のありようを見つけだし、かたわら、その学習過程を通して、人間関係の「学び方」を体得することができる。体験学習のステップを踏む（学び方を実行する）ことにより、私たちは、講座などの与えられた学習の場だけでなく、日常生活体験からも多くのことを学ぶことができる筈である。

体験学習による学習法は、あらゆる分野の学習に有用であるとは言えないが、人間の行動、人間関係や人間がかかわっているさまざまな問題（例えば集団や組織の中の問題）を学習するのにきわめて有用な方法である。ただ、それだけでなく、その学習法は、さまざまな学習の場で活用することができる。例えば、講義形式の学習の場でも、講師とのやりとりや学習者相互の話し合いの場をつくることで、学習内容を深め得るとともに、相手との関係を通して、自分のありよう、生き方を検討し、自己の成長へとつながっていくことになる筈である。

2 生涯学習と体験学習をつなぐもの

体験学習方式を生涯学習にとり入れることの有用さについては、既に述べてきたが、ここでは、それらをつなぐ要素にふれてみたい。

(1) 自学自習こそ学習の基本である。

私たちは、学校をはじめさまざまな機会をとらえ、さまざまな方法で学習している。技能的なものは別として、その多くは講義中心であり、学習者は受け身になっていることが多い。知識を得ることによって満足することができるが、ともすれば、その人自身のものとして深まりにくく、時間とともに忘れ去られることが多いのではないだろうか。私たちは、自ら学ぶ意志をもって（自らを動機づけて）学習の場に臨んだときに、より多くを学び、学んだものがその人のものとして深く沈澱し、生きてくる。その人の生き方に強い影響を与えていくことになるのだと思う。体験学習では、学習の場に能動的に参加しないと学ぶものが少なくなる。学ぶための場は提供されるが、そこで何を学びとるかは、本来的には学習者自身に任される。体験学習では、すべての人が同じことを学びとる必要はなく、学習者の欲求、経験、状況などによって、それは違ってよい。生涯学習にとって必須の要素ではないだろうか。

(2) 人は学習のリソース（資源）である。

私たちは、書物、文献、資料などから多くのことを学んでいる。しかし、それ以上のものを、人から学んでいることは確かである。講義を聴くこと、人と話すこと、人とつきあうことなどから、直接的に多くのことを得ている。それは、人（他者）は自分とは異なるからである。知識、経験、生活習慣などそれぞれが違ったものを持っていて、その違いが、かかわりあうことで、お互いを成長させていく。相手と同調するより（自分との共通点を見つけ、あわせていく）、異なっている点を見つけ、受け容れていくことから沢山のこと（場合により書物にないものなど）を学んでいく（そのためには、次に述べる相互作用の質が問題になるが）。体験学習の場は、人のリソース活用の場である。多くの場合、体験学習はグループで実施される。自分以外の人がかかっていた体験を、また、ともに学んでいる学習の場で体験したことを共有化する（そのような場をつくる必要があるが）ことから学ぼうとするからである。生涯学習のためにつくられた場に、人が集うとするならば、そこに学習のための素材が満ち溢れていると考えてよいのではないだろうか。

(3) 相互作用（関係）が学習を促進させる。

私たちは、人との相互作用（関係）を通して、多くのことを学び成長してきた。独りでの学びも大切であるが、人とのかかわりが学習を促進していくものであることを経験を通して知っている。一見、かかわりが学習を妨げているように見えることもあるが、結果的にはそうならないことが多い。(2)で述べたように、人がそれぞれ持っているリソースが十分に活用されるためには、学習の場での学習者の相互作用が質、量ともに充分であることが必要である。特に、その質が問題となる。十分に話し合われる

ことも必要であるが、それが表面的なものに終始するならば、学びを深めるものとはなり難いからである。より開放的な関係がもたれることで、それぞれが持っているものが、そのまま相手に伝えられることとなり、学びを助けることになる。体験学習は、相互援助の学習である。相互作用が起こりやすいように、学習の場が設定される。例えば、コミュニケーションの学習をするために、「問題解決の実習」（そのために特別につくられた教材）を学習者のグループに提供するとすると、その教材は、問題を解決するためには、どうしてもグループのメンバーが相互に各自のもっている情報を提供し、話し合わねばならないようにつくってある。相互作用が起こることによって自のづと学習が促進されることになる。言うまでもなく、それも学習者の姿勢に多分に影響されることであるが。

3 生涯学習の核となる体験学習方式

今、私たちのまわりでは、生涯学習の名の下に多種多様、さまざまなプログラムが展開されている。教養講座、技能の習得に関するもの、スポーツ関係などなど。しかし、学ぶものと教えるもの、学ぶもの同志の相互関係から学習を深めていくことを意識されたものは数少ないのではないだろうか。自然発生的に学ぶもの相互の関係が深まり、講座そのものよりも、相互の関係から学んだことの方が多い場合も結構あるように聞く。それは、意識せずとも、その場で起こっていること（プロセス）が作用した産物であると言えよう。どのようなプログラムであれ、そこに複数の人たちが集まるとすれば、2で述べた3つの要素が充たされるような場を、意識的につくることを、関係者は強く考えるべきではないだろうか。体験学習方式の底に流れている考え方や、体験学習そのものが、生涯学習を考え、展開するときの核になると私は考え、実践している。

Ⅲ 体験学習をベースにした生涯学習プログラムの実践例

以下に紹介するのは、筆者が実施したものの一つである。同様のものを、10年位前より現在にいたるまで、筆者は、名古屋市千種社会教育センター、愛知県高蔵寺市市民大学、朝日カルチャーセンターなどで実施してきた。その一部実施も含めれば、大学や地方自治体での公開講座、企業内教育などでも実施してきている。

ここでは、筆者が最も最近に実施したものを報告する。

- ◆講座名 成人大学講座 「人間関係の知恵」——体験しながら学ぶ——
- ◆主催者 愛知県尾張旭市教育委員会
- ◆期間 1990年10月2日～12月18日 火曜日 午前10時～12時

- ◆場 所 尾張旭市勤労青少年ホーム（中央公民館）
- ◆講 師 星野欣生（南山短大 人間関係科）
- ◆参加者 申込者 36名（女性35名、男性1名） 参加実績 25名前後
- ◆プログラムの全体（プログラム終了時に作成したもの）

尾張旭市中央公民館

1990.12.18

「人間関係の知恵」 全日程表

- I 【この講座の入口で】
 - ・互いに知り合う 「フォード・チョイス」
 - ・ねらい、学習のすすめ方
 - ◆体験学習について
 - II 【人間関係って何】 「ワンウェイ・ツーウェイ」
 - ◆コミュニケーションとは
 - ◆人間関係の諸要素（ここでの学習の中味と関連づけて）
 - III 【思い込む】 「第一印象」「貴婦人と老女」「9つの点」
 - ◆第一印象、思い込み、先入観、固定観念
 - IV 【すき、きらい】 「私の価値観」
 - ◆対人関係と価値観
 - V 【プロセスに気づく】 「バスは待ってくれない」
 - ◆プロセスとは
 - VI 【話す、きく、みる】 「ことばの意味」
 - ◆話すこと
 - 「聴く・観る」
 - ◆きくこと
 - ◆みること
 - VII 【感じる】 「無言の集団作業」
 - ◆非言語コミュニケーション
 - ◆感情と対人関係
 - VIII 【わかる】 「人生相談」
 - ◆人を理解すること
 - IX 【つきあう】 「危機からの脱出」
 - ◆コンセンサスについて
 - X 【生きる】 「私の対人地図」
 - ◆葛藤と人間関係
 - ◆人間の成長と人間関係（心の四つの窓）
- 註 【・・・】… テーマ、「・・・」… 実習（ふりかえり・コメントを含む）
- ◆ … 小講義

◆プログラムの実際

◎スタッフとしての教育目標

- ・参加者が自分の人間関係のありようをチェックしてみる
- ・参加者が自分の生き方を考える（将来に向けて）
- ・参加者が自分の可能性を試してみる
- ・自己理解、他者理解を深める
- ・人間関係とは何かを考え、まとめる
- ・新しい人間関係を創りだしてみる

◎第一回目に参加者に提示、配布された講座のねらい、すすめ方、参加者への期待

★講座のねらい

- ・人間関係を学ぶ
- ・自分の対人関係のありように気づく
- ・さまざまな人たちと新しい関係をつくる（仲間づくり）
- ・これからの自分の生き方を考える
- ・学び方を学ぶ

★講座のすすめ方

- ・体験学習の方式ですすめる
具体的には、対人関係の実習（通常、「実習」とよぶ）実習の
ふりかえり小講義などを中心にすすめられる

★学ぶ人への期待

- ・プログラムに、積極的に、自己投入する
- ・思い切って、新しい試みをする
- ・自分、他者、グループの動きに、いつも、関心を持つ
- ・お互いに援助しあう
- ・楽しく、開放的な雰囲気づくりをすすめる

以下には、各回ごとに実施したプログラムの概要、参加者の様子、参加者の感想（毎担当番の人がその日の講座の内容や感想を書いている）を記す。

《第一回》（10月2日）『この講座の入り口で』

講座の初日であり、参加者は、期待と不安の面持ちで、緊張気味。

この日のねらいは、緊張をほぐす（アイス・ブレイキング）ことと、これからともに学ぶ者として、互いに知り合うきっかけをつくること。更にこの講座へのねらいと期待をわかちあうことである。そのために、「強制された選択」という実習を実施した。この実習は、あらかじめ用意された4枚のラベル（例えば春、夏、秋、冬の4枚）を部屋の4隅に貼り出し、それを見た参加者はそれぞれの基準で、いずれか1つを選択し、そのコーナーに行く。そして、たま

たまそのコーナーに集まった人たちで、自己紹介、自分のねらいの説明、そのコーナーを選んだ理由を話し合う。これを4回繰り返すうちに、大半の人と話し合い、徐々にうちとけてきた。その後、実習をしておのふりかえりをし、次いで、講座のねらいとすすめ方の説明。最後に「体験学習について」の小講義を行なった。

【参加者の感想から】

——不思議に思えたのは教室の雰囲気が始めて出逢った人たちなのに、どこかつながっている感じがしました。学習もとても楽しく、あっという間の2時間でした。開放的な雰囲気なのでどんなことでも積極的に参加しようとする——

≪第2回≫（10月9日）『人間関係って何』——コミュニケーションの基本を考える——

「コミュニケーションとは」ということで、実習「ワンウェイ・ツーウェイ」を実施。これは、参加者から一人のボランティアを募って、前に出てもらい、用意された図形（紙に書かれたもの）を、1回目は一方通行で、2回目は両面通行で、他の参加者に伝達し、伝わり方の違いを確かめあうものである。実習のふりかえりをした後、「コミュニケーションとは」の小講義を行なった。次いで、この講座の内容に関連づけながら、「人間関係の諸要素」について説明をした。とまどいながらも、参加者はコミュニケーションの二つの結果の違いを体験的に気づくことができたようであった。

【参加者の感想から】

——体験学習では、〇〇さんに活躍していただき、実際、私たちの日常生活の中で意外に気づかずにいる大切なことを、この学習によって再認識することができました。——

≪第3回≫（10月16日）『思い込む』

この日から1回づつテーマにそって、学習をすすめる。今回は対人関係を妨げているものとして、「思い込み」をとりあげた。実習「第一印象」を実施。6人程度のグループを任意につくって、用意された項目毎にグループのメンバー相互に相手に抱いた印象を伝えあい、その理由を話し合った。ここで、思い込みの前提の一つとしての第一印象のことを考え、その後、「貴婦人と老女」「9つの点」をつかって、各自の思い込み現象を確認した。最後に「対人関係を妨げているもの」(1)として第一印象・思い込み・先入観・固定観念について小講義をした。参加者の多くは、ここでの学習方法に興味を抱きはじめ、熱中するようになってきたが、片方で少数ではあるが欠席者が決まってきた。

【参加者の感想から】

——講座の皆様の明るさと人間性にふれ、一歩ひいたやさしさで何事にも好奇心を持って命あるかぎり前向きな人生を生きていけたらと思っている私で

す。――

《第4回》(10月23日)『すき、きれい』

対人関係を妨げているものの2回目として、「価値観」をとりあげる。実習「私の価値観」では、前回とは違ったグループをつくり、愛情、富、健康など10の項目に、自分が大切と思うものの順位づけをし、グループでわかちあい、話し合った。実習のふりかえりをした後、「対人関係を妨げているもの」(2)として「対人関係と価値観」について小講義をした。ここでは、同性でありながら、お互いの価値観の違いに驚く姿もみられた。

【参加者の感想から】

――価値観はそれぞれの人が持っていて、考え方や判断の基準となっているもので、家族、地域(社会)、国でそれぞれつくられ、年齢、経験、環境でかわるものであることを知りました。はじめは、全然違う考えやくい違いがあっても、話し合っていく中に理解できる場合もあるとのことでしたが、ほんとうにそうだなあと思いました。――

《第5回》(10月30日)『プロセスに気づく』

プログラムも真ん中にさしかかってきた所で、互いのかかわりを一層深めるということと、より開放的な雰囲気をつくる目的で、グループの協同作業を行なった。と同時に、対人関係はプロセスであることを学ぼうとした。実習「バスは待ってくれない」は、6人グループの各メンバーに分散して渡された情報を、口頭によるコミュニケーションのみで組み合わせ、課題を解決するもので、グループで課題を解決していく過程で、その場で起こっている事柄(プロセス)に気づこうとするものである。参加者は、時間を忘れて作業に熱中していたが、同時にグループの中での自分の行動の仕方について気づくことも多かったようである。実習のふりかえりの話し合いの後、「対人関係の中で起こっていること(プロセス)とは」ということで、小講義をした。

【参加者の感想から】

――その過程をふりかえってみて、なにげない一言がキーワードとなりうることを、誰でもリーダーシップをとりうることを感じました。今日のグループは本当に気持ちの良いコミュニケーションができたように思います。毎回ユニークな方法で、普段気づかない意識していないようなところにスポットをあてられるこの講座、とても楽しみに出席しています。――

《第6回》(11月6日)『話す、きく、みる』

コミュニケーションの基本的な要素として、話す(口)、きく(耳)、みる(目)の3つをとりあげた。実習「ことばの意味」では、意味論から、抽象のレベルの問題と報告・推論・断定について具体的な文章をつかって実習。その後、「ことばによる表現・意味論」について小講義をした。ついで、実習「聴

く」「観る」を実施。これは、一定のルールを設けての対話と普通の対話の観察を通して、対話の3つの要素の重要性を考えた。実習のふりかえりの後、「きくこと」「みること」について小講義。参加者は、非日常的なルールに戸惑いながらも熱中していたようである。

【参加者の感想から】

— 毎回、実習グループのメンバーが変わりますが、初対面であっても、とてもいい雰囲気の中で楽しく実習ができます。これも先生の一方的な講義ではなく、「体験しながら学ぶ」という開放的な雰囲気でご指導くださる先生に感謝します。 —

◀第7回▶（11月20日）『感じる』

ここでは、前回の観察の問題を実際の作業をしながら実践してみるということと、感情の問題を考えるために、「無言の集団作業」の実習をした。これはグループが無言で、メンバーがそれぞれ持っている紙片を全部つかって、ある図形をつくる実習で、互いにメンバーを観察しあうことの必要性、作業中の感情の動きとその影響関係などを学習した。実習のふりかえりの後、「言葉によらないコミュニケーション」「感情と対人関係」について小講義。参加者は、知らぬ間に、互いに感情をそのまま表わしながら作業を継続、新しいかかわりを体験していた。

【参加者の感想から】

— 最初はドギマギしていましたが、出席するたびに、皆さんの非常に熱心に、そして、明るく楽しく取り組んでいらっしゃる姿を見、おどろいています。この講座を通して、対人関係の考え方、あり方が再認識できるとともに、私自身の動機づけの場となっています。 —

◀第8回▶（11月27日）『わかる』

実習「人生相談」では、新聞の悩み事相談をとりあげ、それへの回答をグループで話し合い、決定することを通して、共感的に人を理解することを考えた。実習のふりかえりの後、「人を理解すること」（共感的理解）について小講義。各グループとも、ホットな討議を展開、時間オーバーも気づかないほどだった。

【参加者の感想から】

— 同じ文章を読んでいるのに、相談者は弱い消極的な人物であると思う者や、全く反対に強い自分を大事にしている人物であると思う人など、話し合いを始めた最初から違う意見がでて、これでひとつのまとまった文章が書けるのかと心配していましたが、進むにつれて、それぞれの言いたいことを何とか補うような答ができたように思います。 —

《第9回》(12月11日)『つきあう』

集団による意志決定のひとつとしてコンセンサスを体験するとともに、その過程を通して葛藤の問題をとりあげた。実習「危機からの脱出」では、与えられた課題に対して、まず、個人で意志決定し、その後、コンセンサス法によってグループで意志決定した。結果、個人よりもコンセンサス法の方が、正解率が高いことが証明された。実習のふりかえりの後、小講義「コンセンサスについて」「葛藤と対人関係」を行なった。参加者は、この講座でのこれまでの体験を生かしながら、和やかな、明るい雰囲気の中で、充分に意見を言い合い、また、充分に聴き合って、納得できる結論をだしていた。

【参加者の感想から】

— 毎回楽しくて何か心の中の発見があるような気がするので、毎週火曜日が楽しみです。— 教室の中ではわかっていても実生活の中ではなかなか思うようにならない。まだまだ未熟なので。そういうことに気づくようになっただけ、この教室にでたかいがあったと思っているのです。—

《第10回》(12月18日)『生きる』

この日は最終回であり、全体のしめくくりの意味もこめて、実習「私の対人地図」からはじめた。丸、三角、四角などが無造作に書かれた用紙をつかって、これまでの自分の対人関係を表現する実習である。自分が今までどのような人々とのようにかかわり、影響を受けてきたかがわかっていく中で新しい発見をした人もいたようである。数人でわかちあいをしたが、開放的な雰囲気ですすめられていた。その後、「人間の成長と人間関係」(関係的成長)というテーマで、「ジョハリの窓」にもふれながら小講義をした。最後に全日程表を配り、この講座でやってきたことを簡単にふりかえって終わった。

講座の全部が終了した後に書かれた参加者の感想文から、いくつかを以下に書きとめてみる。

- ・ 毎回毎日が痛切にこころを動かされる講座でした。
- ・ 同じ目的を持った皆さんと体験学習ができとても勉強になりました。
- ・ 体験学習は始めてだったが、本当に楽しく学ぶことができた。
- ・ 小グループでは、自分の思っていることを気軽に話せて感謝している
- ・ 最初は緊張感があったけれど、受講生同志お互いに知り合うとてもよい場だった。講座を通して相手を知り自分自身を見なおすととてもよい機会だった。
- ・ 勉強、勉強と言われる現在、もっと必要なものとは——少しわかりかけてきたような気がします。
- ・ もっともっと続けたいという心境です。
- ・ 大変面白かった。心の角度が変わった思いです。

- ・実習しながら学べるという方法で講座が進められたので、退屈することなく、皆といい感じがかかわることができました。実生活に生かすことができるような気がしています。

その後、主催者からいただいたお便りによると、有志の働きかけでこの講座に参加した人たちが、学習グループをつくり、今後も自主的に学習を続けていく由である。

[参考文献]

- ・瀬沼克彰 「生涯学習と企業および行政の役割」 ダイアモンド社 1990,11
- ・星野欣生 「体験学習」(「人間関係」第4号) 南山短大人間関係研究センター 1987,3

